埼玉県退職校長会　会報

題字・新井俊一
第183号
令和７年１月

1～2　巻頭言
3～8　支部別教育推進協議会報告
9　理事会報告
10　関ブロ報告
10～16　一人一言
17　現・退校長会役員研究協議会報告
18　囲碁・ゴルフ大会
19　長寿会員への寿詞贈呈
20　文芸・編集後記

―ウォーキングとの出会い―

埼玉県退職校長会副会長　神山　則幸

２００３年３月公職を退ぞき、それまで予定を書き込んでいた手帳が嘘のように空白になり、その空白を埋めるため街歩きを始めた。

以前から高血糖の治療として歩いて通勤していたこともあり、自動車の免許を持たない私にとって歩くことは苦にならなかった。スカイツリーや葛西臨海公園までも自宅のある西川口から荒川沿いに楽しみながら歩いていくこともあった。

そんな矢先、ＮＰＯ法人埼玉県ウォーキング協会長の小川正先生からお誘いをいただき協会員として活動を始めた。県内全ての市町村をめぐる活動をする中で、背筋を伸ばし正しい姿勢で歩くことの大切さとウォーキングシューズの素晴らしさを知った。ウォーキングシューズは、江戸時代のわらじと同様で、踵を保護し、指先に重心がかかるようになっていて、長い距離を疲れずに歩かせてくれ、歩く楽しさが体感できた。

ある時、歩き始めに胸が苦しくなり、歩いているうちに楽になるような状態が続き、行きつけの医者に話をしたところ狭心症の症状といわれた。私は、日頃心の広い人間と思っていたのにと言ったら、バカなことは言ってないですぐに専門病院に行けといわれ、診てもらうと、心筋梗塞になりかけているとのことですぐに手術。冠動脈二か所にステントをいれ事なきを得た。まさにウォーキングが命を救ってくれた形となった。

いまは、協会長として例会に参加し、「歩く楽しさ歩ける喜び」を仲間と一緒に実感しながら、日常生活でも「一駅・二キロ・三階」は歩くことを心がけ、健康長寿に努めている。

定年延長の影響を想う

北足立北部支部長　井関　由美夫

公務員の定年延長が始まり2年目を迎えています。令和6年3月末で60歳の「役職定年」を迎えた校長先生は、更に1年間の校長職以外の職を務めて、令和7年3月末に定年退職となります。心配な点は、定年延長で、今後、退職校長会の入会者数がどのように変化するか、であります。定年の前段階の「役職定年」60歳で入会できますが、入会者が減少しないか、かねてより心配していました。今年度の結果では、私の属する北足立北部退職校長会のエリアの役職定年の校長先生は、12名で、その内の8名が入会されました。入会率67％と例年並みに近く、安堵しました。定年延長の影響がなかったということです。しかし、埼玉県全体を見ると、役職定年した人は、１６９名ですが、入会者は、83名で、入会率約50％となりました。例年の入会率が、75％前後で推移して来ましたので異例のことであります。あと1年間、様子を見ないと何とも言えませんが、定年延長を機に今後、入会者が激減するのではないかと深く憂慮するものであります。原因として、役職定年が、完全な定年ではないということがあるのかもしれません。役職定年後、定年まで数年間、主幹教諭などとしての勤務がありますので、校長職を終えた、という感慨が我々とは違うものがあるのではないか、と愚考します。

コロナ禍以後、会の活動が停滞しているように思います。今年度も入会の勧誘が始まりますが、多くの方が入会されることを願って、結びとします。